

復元における石瓦大きさの一部変更と平瓦の重ねについて

平成 25 年 10 月 24 日におこなわれた第 2 回山里口御門復元考証専門委員会では 2. 外部仕上げ 1) 屋根と軒裏で、屋根瓦の形状について下記の様に報告した。

(前略) 屋根の照りや軒先の反りは瓦門櫓 (第 1 回資料添付) や巽櫓にみられるので、建物の大きさに合わせた状態で適宜復元する。棟積や鬼瓦は瓦門櫓には笏谷石製で、一石による簡単なもの (棟は笠石と棟石 2 石) が使われ、多少端部で反るので、これにならって復元する。妻側の軒出は石垣面に瓦の彫り込みなどがあり、塀あるいは石垣にすりつけるものとする。石瓦の形状や葺き方、軒先の納め等は既存遺構 (丸岡城天守 (写真 3-4、5)、正覚寺山門 (写真 3-6)) を参考とする。(後略)

また、平成 26 年 2 月 14 日におこなわれた第 3 回山里口御門復元考証専門委員会では (3) 外観の再検討として 1) 屋根と軒裏で、下記の様に報告した。

(前略) (瓦は長さ 2 尺で重ねを 4 寸程度。石垣痕跡の彫り込みの重ねは 7 寸程あるが、施工のために大きくしたと判断する。そのことから、軒先の出が 3 寸前後は短くなることも考えられる。軒先は多少反りが欲しいでしょうし、棟側では二重に垂木を入れずに簡単にしていると考えて直線とした。軒先は反りのため野垂木を入れる。すべてを二重垂木とする例もあるが、江戸城櫓門ではそうではないのでそれを参考にした。石垣の軒先らしい風食痕跡とは一致しないが、本想定と古写真とは軒出がよく合致している。なお、軒先らしい風食痕に瓦割をあわせると、彫り込み溝に一致しない。本復元では明らかな石瓦痕跡を軒先らしい風食痕より重視する。)

ところが、福井城本丸の西石垣上 (福井県警建物の西側石垣) で、幅と長さの小さな平瓦 1 点と丸瓦 3 点を平成 26 年 1 月頃に発見した。また、J R 高架化事業にともなう発掘調査でも、当初想定としていた丸岡城天守の石瓦に比べて明らかに小さな石瓦の一部が発見されている。そこで実施設計に当たり再度調査し、検討した結果を以下に報告する。

(1) 調査事例

1) 本丸西石垣上での発見石瓦 (写真 1、2)

- ・平瓦 幅 255 mm 程度 中央弛み 21 mm 程度 厚 ~ 45 mm 程度 長さ 360 mm 程度
- ・丸瓦 丸瓦径 150 ~ 130 mm 程度 頭径高 75 ~ 70 mm 程度 尻径高 130 ~ 110 mm 程度 重なり部 25 ~ 30 mm 程度 長さ 360、300 mm 程度



写真 1 県庁西側石垣上の石瓦遺物



写真 2 県庁西側石垣上の石瓦遺物

2) JR高架化事業にともなう発掘調査（当初の大きさが判断できるもの）

なお、この石瓦は城下の門や特別な建物跡から発掘されたものというものではなかった。

- ・平瓦 幅 300～320 mm程度のものに幅 255 mm程度・幅 270 mm程度が1枚ずつ混じる
中央弛み 27～30 mm程度
- ・軒先平瓦 幅 300～320 mm程度のものに垂れ 60～72 mm程度 垂れ下端は多少小さくなる 紋なし
- ・軒先丸瓦 丸瓦径 150～140 mm程度、170 mm程度（胴のすぼまり、反りがきついで特殊部分とみられる。例えば拝み丸瓦） 長さ 470 mm程度 紋なし 多少手前に傾く 6～9 mm
- ・丸瓦 丸瓦径 145～150 mm程度 尻径高 110 mm程度 重なり部 30 mm前後 長さ 360、450 mm程度

3) 正覚寺山門の石瓦（写真3、4）

- ・屋根上の石瓦の実測から平瓦や丸瓦の長さは棟の取り付き瓦を除いても葺足が正面 455、485、470、580（軒先）、背面 416、490、445、565（軒先）mmとバラバラであった。平瓦の長さは分からないが、丸岡城天守のように同じ葺足で葺かれていない建物もあることがわかった。（平瓦の長さ寸法がバラバラことは、屋根流れが短いにも関わらず反りをもたせていることに起因していると想像される。）また、軒先丸瓦の紋はみられなかった。



写真3 正覚寺山門屋根



写真4 正覚寺山門屋根（妻面）

4) 古写真の再検討（写真5～9）

石瓦が詳細に写る「旧福井城瓦門及御本城橋」の土塀では丸瓦・平瓦が流れ方向2枚ずつで、石垣にのこる痕跡と一致する。ところが、「御廊下橋写真」の山里口御門の枡形を囲む土塀の丸瓦ははっきりと断定はできないが、流れ方向に3枚程度みられる。さらに同写真に写る手前本丸西側土塀の矩折れ部では明らかに2枚より多い丸瓦（3枚か、切妻破風上にある箕甲部の掛石瓦の作り出し丸瓦は隅の丸瓦を含めて3個みられ、3枚と想定される）確認できる。なお、山里口御門の枡形を囲む土塀の石垣にのこる平瓦痕跡は瓦門両脇土塀と同じく流れ方向2枚である。

基本設計で想定した山里口御門の枡形を囲む土塀の南軒先の平瓦枚数は幅1尺と想定すると19枚で、「御廊下橋写真」の22枚（石垣際の調整瓦を含む）と異なる。写真の瓦枚数22枚と仮定すると、平瓦幅は0.89尺、瓦同士の隙間や瓦の精度を考えると0.86尺前後となる。なお、古写真では石垣取合いの平瓦の幅が小さく見え、幅の小さい平瓦は瓦割による調整瓦とも考えられるが、それでも平瓦の枚数は多い。

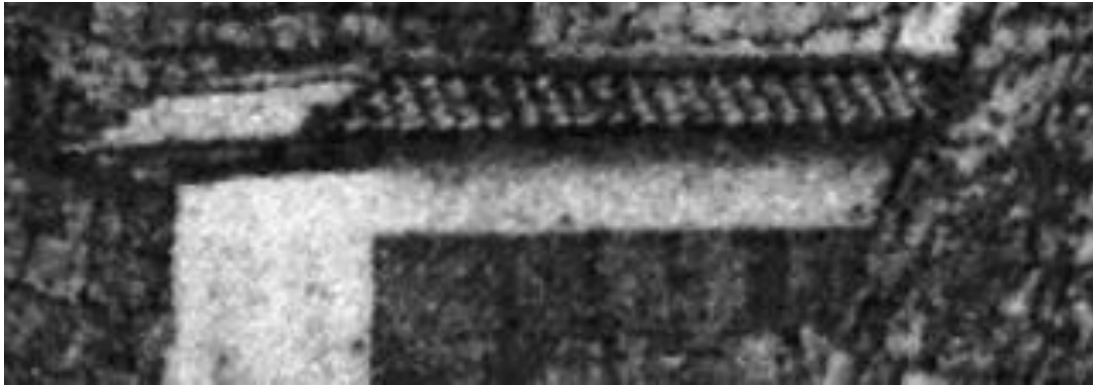


写真5 御廊下橋写真（明治初期頃）（福井市立郷土歴史博物館蔵）より（土塀南面の平瓦は22枚）



写真6 御廊下橋写真（明治初期頃）（福井市立郷土歴史博物館蔵）より（妻の掛瓦3枚?）



写真7 妻掛瓦1 正覚寺山門（大屋根隅瓦）



写真8 妻掛瓦2 正覚寺山門（控柱屋根隅瓦）



写真9 妻掛瓦1 正覚寺山門（脇塀）

(2) 検討結果

以上石瓦の寸法を再検討すると、土塀に用いられる瓦の大きさは2種類あり、瓦門脇の土塀は基本設計どおりの幅1尺、葺足長さは1.5尺程度（軒先は長い、多少小さくなることも考えられる）であるが、山里口御門の枡形を囲む土塀は幅0.86尺前後、葺足長さは復元土塀の流れ長さや石瓦遺物から1～1.2尺前後が考えられる。これは石垣にのこる石瓦痕跡と異なるが、復元時期を古写真にのこる時期と想定しているため、枡形土塀の石瓦は幅や長さの小さいものとして復元する。一方、櫓門や棟門の石瓦の大きさは変更する根拠もなく、建物も土塀と比較して大きいので、復元基本設計の大きさとし、平瓦の重なりは丸瓦遺物の長さを考慮し、4寸～6寸程度と幅を持たせる。